

【小松帯刀】



(尚古集成館所蔵)

新しい時代のリーダー

小松帯刀たてわき

江戸幕府が朝廷に大政を奉還ほうかんし、新しい時代が始まる頃のことです。西郷隆盛が坂本龍馬りょうまに尋ねました。

「坂本さん。新政府に最も必要な人は誰でしょうか。」

すると、龍馬は間髪かんぱつを入れず、

「それは、薩摩さつまの小松さんでしょう。」

と、小松帯刀の名前を挙げました。多くの要人との付き合いがあり、人を見る力に長けていた坂本龍馬をして、そう言わしめた小松帯刀とは、いったい、どのような人物だったのでしょうか。

小松帯刀は、一八三五年（天保六年）、薩摩国喜入領きいれ

この章では、年齢は満年齢で表記する。

【大政奉還】

一八六七年（慶応三年）。政権を江戸幕府から朝廷（天皇）へ返すこと。

【関連年表】

- 一八三五年 誕生
- 一八五六年 小松家養子となり家督を継ぐ。
- 一八五八年 小松帯刀清廉と改名する。
- 一八六二年 薩摩藩の家老となる。
- 一八六三年 薩英戦争
- 一八六五年 薩摩藩英国留学生出発。
- 一八六六年 京都小松邸で、薩長同盟が結ばれる。
- 一八六七年 薩摩藩の城代家老となる。
- 同年、大政奉還が行われる。
- 一八六八年 明治政府の参与職と総裁局顧問に就任する。
- 一八七七年 死去

主肝付兼善きもつぎかねよしの三男として生まれました。幼い頃は尚五郎なおごろう

と呼ばれ、十五歳になる頃には、薩摩藩内の若手下級武

士の集まり（後の精忠組せいちゅうぐみ）へ積極的に顔を出し、中心

人物である西郷隆盛や大久保利通達とも意見交換をして

いたようです。また、時折出かけた温泉でも、正体を隠

し、民衆と気さくに語り合いながら多くの情報を得てい

たといえます。ある日、お付きの者が、

「やはり温泉は薬になりますね。」

と話しかけると、尚五郎は、

「そうだな。しかし、温泉は保養のためばかりではない

よ。湯船の中では、多くの人々と世間話をし、ためにな

る話をたくさん聞くことができる。わたしは、温泉では

生きた学問ができると思っているのだよ。」

と答えたといえます。尚五郎には、多くの人々の考えを

素直に聞くことのできる才能が備わっていたのです。

【精忠組】

西郷隆盛や大久保利通らが結成した薩摩藩はんの中の組織で、同志が定期的に集まり、様々な問題について語り合っていた。

【考えてみよう】

帯刀が人々の話を積極的に聞くこととしたのは、なぜだろう。



【吉利屋敷跡】

(現在の日置市立吉利小学校)

一八五六年（安政三年）、二十一歳の尚五郎は、薩摩

国吉利領主であった小松家の養子として家督を継ぐこと

になり、その二年後、名前を小松帯刀清廉と改めました。

初めて領地の吉利に入った帯刀は、家臣と食事を共にし、

領地や領民の生活について、様々な話を聞いていきます。

「昨年はこの地方が干ばつで、米の収穫が半分しかあ

りませんでした。生活の苦しい農民たちが、年貢を減ら

してくるようお願い出てきました。」

と家臣が報告すると、領民のことを心配した帯刀は、

「分かった。そのような状況なら農民も大変だろうから、

年貢を減らしても差し支えなかるう。」

と、すぐにその家臣に命じ、年貢を軽くしたと伝えら

れています。

また、「せつぺとべ」という田植え踊りや「十五夜

綱引き」「草相撲」など、領民が楽しみにしている行事

【領主の仕事】

当時の地方の領主は、普段は鹿
児島の城下に住み、時々自分の領
地に帰っていた。

【年貢】

その頃の薩摩藩では、六公四民
から七公三民、つまり十分の六か
ら七までの米を年貢として納めさ
せていたが、年貢が軽くなること
はほとんどなかった。

にも進んで参加し、皆と分け隔てなく、楽しく酒を酌み交わしたと言われています。領民達は、

「ああ、立派なお殿様が来てくださった。今度のお殿様は、我々のことを大切にしてくれるお方じゃ。」

ととても喜び、「小松家の名君」との評判は、たちまち藩内に知れ渡りました。

この評判は、やがて当時の薩摩藩で実権を握っていた

島津久光にまで伝わり、一八六一年（文久一年）、帯

刀は御側役に登用され、翌年には家老に昇格します。

帯刀が、まだ二十七歳の時のことでした。

それから間もない一八六三年（文久三年）の薩英戦

争で、薩摩藩はイギリスの優れた兵器の前に完敗します。

西洋の科学力に驚いた帯刀は、これらの進んだ技術を学

ばなければならぬと考え、蒸気船二隻の購入や、留学



【御側役】

藩主の近くに仕え、政治の取り継ぎを行う、家老に次ぐ重要な役。

【家老】

藩の政治の責任者であり、複数人いる。

なお、帯刀がこの後に三十二歳で昇格した城代家老は、その中でも最高責任者であり、藩主のいない間、城を守る役目を負った。

【島津久光】

薩摩藩第十代藩主斉興の三男。

異母兄の斉彬の死去に伴い、子の忠義が藩主に就くと、後見役として藩の実権を握る。

【薩英戦争】

横浜の生麦事件が原因で起こった、薩摩藩とイギリスの戦争。この戦いで敗れた薩摩藩は、外国の優れた技術を知ることとなる。

【集成館】

島津斉彬が現在の磯地区に整備した、西洋の様々な技術を取り入れた日本で最初の工場群。

現在の鹿児島市にある尚古集成館は、その一部を保存・再現したもの。

【尚古集成館】



生の派遣などの事業を進めました。また、磯の集成館

の再興にも取り組み、軍艦くんかんや汽船の修理を行う蒸気機械

鉄工場の設置を行っています。これに対しては、

「修理工場を作るより、軍艦・武器を買った方がいいではないか。なぜ修理工場を造らねばならないのか。」

「せっかく交易を盛んにして、苦労して金を儲もつけているのに、その金で修理工場など作る必要はない。」

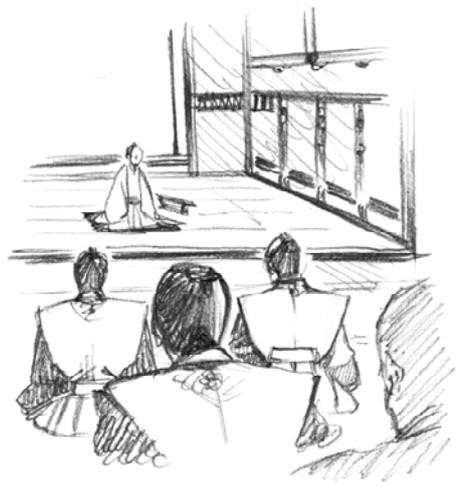
といった反対意見がたくさん出されました。しかし、帯刀は、藩の命運を握る立場として、

「これから我が藩は、軍艦や汽船をたくさん購こひ入いしていくだろう。船が増えると、必ず修理が必要になる。だから、今は余計なお金に見えるかもしれないが、藩の将来の発展に必ず役に立つはずだ。」

と、反対する人たちを粘り強く説得しました。このような帯刀の、新しいものを進んで取り入れようとする考え

【読んでみよう】

「薩摩藩英国留学生」(一〇九ページ)も、あわせて読んでみよう。



方や将来を見通す力が、他の藩に先んじて薩摩藩の近代化を進め、財政を豊かにしていったのです。

一八六七年（慶応三年）、京都の二条城では、幕府として大政奉還に踏み切るべきか否かの話し合いが行われていました。この会議には、各藩の藩主や、幕府の重臣が参加しています。帯刀も薩摩藩主の名代として出席していましたが、二百六十年も続いた江戸幕府の将来がかかる大会議だけに、誰もが緊張して、声ひとつ出せない様子でした。やがて、

「將軍様、おなりー。」

という声とともに、十五代將軍徳川慶喜よしのぶが、しずしずと上座に着きました。まず、老中筆頭の板倉勝静かつきよが、大政奉還の趣意書を読み上げます。次に大目付の永井尚志なのおゆきが、

【趣意書】
行おうとする事柄の趣意を記した文のこと。

【名代】

代理を務める者。

【老中筆頭】

幕府の政治を行う実質の責任者で、老中のまとめ役。

【手控帳】

署名を行う記録簿のようなもの。

【記帳】

氏名を記入すること。

「上様（將軍）にすぐに拝見し、意見を申し述べたい方は、その姓名をこの手控帳てびかえちように記帳されよ。」

と告げ、手控帳が出席者の間を回され始めました。しかし、この案に賛成すれば倒幕派とうばくと見られるし、反対すれば朝廷に反することになるので、出席した者たちは皆、自分の立場を明確にできず、なかなか筆を執る者はいませんでした。

そのような中、手控帳が帯刀のところに回ってきました。すると、意を決した帯刀は筆を執り、真っ先に手控帳に署名したのです。帯刀が署名すると、土佐藩の後藤象二郎しょうじろうら四名も、次々に署名をしていきました。

会議終了後、帯刀をはじめとする五名が別室に招かれ、將軍と話すことが許されました。帯刀は、

「日本国のために大政奉還の御英断、誠に感銘かんめいの至りと存じます。この上は、一刻も早く政権を朝廷へ返上なさ

【後藤象二郎】

土佐出身の藩士で、薩土盟約の締結にかかわる。

【式日】
重要な儀式ぎしきを行う日のこと。

れますようお願い申し上げます。」

と、自分の意見を堂々と述べました。慶喜は他の者にも意見を求めましたが、全員が帯刀と同じ考えでした。

「分かった。皆の意見を聞き、決心がついた。決心した上は、早速、明日にでも返上の手続きを取りたい。」

慶喜がそう言うと、老中筆頭の板倉勝静が、

「明日は朝廷の式日であるから、返還に差し支えがあるのでないでしょうか。」

と難色を示しました。しかし、日頃は温厚な帯刀が、それを聞くやいなや、大きな声で詰め寄ります。

「何を言われる。式日とあっても、このような大事な問題を、わずかでも延ばされることは理解できない。一刻も早く、返上方、ぜひお願い申し上げます。」

帯刀が、強硬きやうこうに早期の大政奉還を主張したのには、理由がありました。それは、返上が一刻でも遅おくれてしま

【考えてみよう】

日頃は温厚な帯刀が、大きな声で意見したのはなぜだろう。

えば、賛成派と反対派で国内が真っ二つに割れ、内戦が起こったり、それに乗じて外国がつけ込んでくる恐れがあつたからなのです。

帯刀の迫力に押された慶喜は、

「よく分かった。明日にでも返上しよう。」

と応じ、大政奉還が成し遂げられたのでした。

その後発足した明治政府で、あの坂本龍馬の言葉どおり、帯刀は参与職と総裁局顧問に任ぜられたほか、その後も、外交事務掛^{かかり}などの要職を歴任しました。また帯刀は、「新政の改革は、まず土地人民を朝廷に返すべきである」と考え、率先して小松家の領地の返上や家格の廃止を提案し、その手本を示しました。当時のイギリスの外交官のアーネスト・サトウが、その著書「一外交官からみた明治維新」の中で、帯刀のことを次のよ

【参与職・総裁局顧問】

内閣の中心的役割を果たす要職。

【外交事務掛】

今でいう外務大臣の職。

【家格】

その家に代々与えられた格式。

【アーネスト・サトウ】

イギリスの公使館の通訳や駐日英国公使を務めた人物。

イギリスにおける日本学の基礎を築いたことでも有名。

【小松帯刀墓地】



(日置市吉利)

うに記しています。

「小松は私の知っている日本人の中で、一番魅力みりよくのある人物である。家老の家柄だが、そういう階級の人間に似合わず、政治的才能があり、態度が人に優れ、そして友情に厚い。そんな点で人々に傑出けっしゅつしていた。」

帯刀は、いずれ首相となり、新しい日本の良きリーダーになると期待されていました。しかし、病弱であった帯刀は、一八七〇年（明治三年）の七月、闘病中の大阪の地で三十四年の短い生涯を閉じます。その早すぎる死は多くの人々から惜しまれ、悲しまれましたが、帯刀の気さくな人柄や将来を見すえる力、強い信念と責任感などは、新しい時代のリーダーのあるべき姿として、多くの同志たちに受け継がれていったのです。

【考えてみよう】

小松が示したリーダーのあるべき姿とは、どのようなものだったのだろう。